

ミニデイ【おとこの台所 桜新町だより】

発行責任者 桜新町広報：石井利男、岡元正史

● 春告魚（はるつげうお）＝ニシン（鯧、鯧）。

2024年の旧暦の元旦（旧正月）は、新暦の2月10日。北海道のニシンの漁期は2月、3月から始まります。この時季に獲れる新ニシンは「春告魚」「春ニシン」と呼ばれます。正月のおせち料理に欠かすことのできない「数の子」は、子孫繁栄の縁起物です。旧正月だった頃の北海道では、小樽や石狩でその年に上がった新物の「数の子」を贅沢におせち料理で食していました。新暦に変わり1月になると、前年に獲って塩漬けにした「塩数の子」になりました。



● 旧暦の太陰暦は、月が地球を一周する日数（29.5日）を一ヶ月と定めて、一年は354日です。太陽暦の365日と比べて11日少ない。そこで閏月を作って閏年には一年を13ヶ月にしました。

日本でも、大潮、小潮など月の満ち引きに影響される漁業などでは、今も利便上、旧暦で操業しています。旧暦は沖縄や奄美諸島の一部、長崎、神戸、横浜の中華街（春節の新年）、地方や地域の古くから祭事などに使われています。今でもサウジアラビアなどイスラム社会で使われているヒジュラ暦（太陰暦）では、1日は日没から始まるとされます。

江戸時代の時刻の数え方では、昼は明け六つ（日の出）から始まり、夜は暮れ六つ（日の入り）から始まりました。江戸時代の人たちは一日の始まりを明け六つなのか、暮れ六つなのか、どちらの時刻を生活の区切りにしていたんでしょう。

● 新暦の太陽暦（グレゴリオ暦）は、地球が太陽の周りを一周する日数365日を1年と定めて、自然現象のため端数が出るので、4年に一度、閏年で調整します。グレゴリオ暦は世界の多くの国で採用しています。一日の始まりは深夜0時です。今の日本人は、常識的に一日の切り替わりの時刻は深夜0時と思っています。

● 明治改暦。明治5年12月2日（西暦1872年12月31日）まで太陰暦を使用していましたが、明治政府は太陽暦（グレゴリオ暦）を導入して、翌日の旧暦の12月3日を新暦の明治6年1月1日と改めました。

明治6年が旧暦の閏年の13ヶ月に当たっていたことから、新暦に改暦して12ヶ月にすれば財政的な理由で一ヶ月分の給与を払わなくて済むというのも、明治政府が新暦の採用を急いだ理由と囁かれています（笑）。

いにしえから「暦」は、庶民の文化と日々の生活を支える基本です。

1月の定例会 参加者は、12日（金）13名、17日（水）8名でした。

2月の定例会 1日（木）、9日（金）です。